

江戸時代・文芸界のスター

にしやまそういん 西山宗因

(1605 年～1682 年)



西山宗因肖像 (当館蔵『談林六世像賛』より)

俳聖・松尾芭蕉が「宗因がいなければ、これまでの俳諧の流れは生まれなかった」と評した西山宗因(1605～82)。宗因は熊本に生まれ、15歳で八代城代・加藤正方に小姓として仕えました。加藤家改易により寛永10年(1633)に八代を離れ、その後は京都・大坂で連歌師として活躍。軽妙・斬新なセンスあふれる作風で全国的な人気を得ました。また、俳諧師としても談林派といわれる新風をおこし、井原西鶴ら個性的な俳人を育て、若き日の松尾芭蕉にも多大な影響を与えた人物として有名です。

宗因は正方に仕えるかたわら連歌を学び、15歳から29歳までの青年期を八代で過ごしました。宗因自身、「八代の城下町はずっと慣れ親しんだ場所でとても懐かしい。さらに思い出されるは球磨川と悟真寺、それに白木社(八代神社：妙見さん)

の前の山々の風景だ」と書き記しています。八代の自然環境の中で磨かれた宗因の文芸センスは、後に全国的な人気をえて、江戸時代の文化に俳諧ブームを巻き起こすことになりました。



まつおばしょう
松尾芭蕉

私が俳諧で大成できたのも、宗因先生のおかげです。

宗因自筆短冊 「ながむとて 花にもいたし くびの骨」(当館蔵)



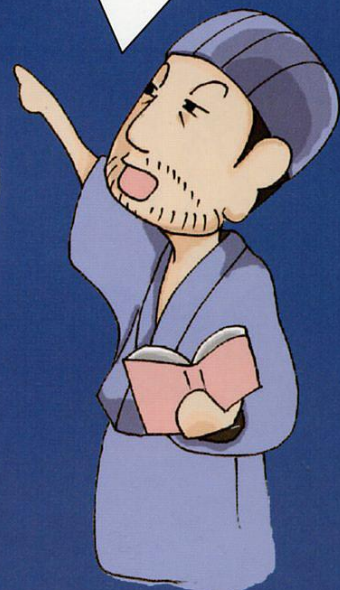
連歌・俳諧ってなあに？

ばしょう先生、**連歌**や**俳諧**とはどういうものですか？



連歌とは「五・七・五・七・七」の和歌を使った連想ゲームみたいなものだ。ある人が詠んだ「五・七・五」に、別の人が「七・七」を付けて一つの歌を完成させて、そこにまたある人が「五・七・五」を付け加えるというように、みんなでどんどん詠みつないでいくんだ。連歌は室町時代から江戸時代にかけて大流行していたんだよ。

そして、**俳諧**は連歌の一種で、滑稽な句のことを言うんだ。



ばしょう先生

最初の五・七・五（**発句**） ※連歌会では主賓が詠む

日の御影いたる
かぎりや神の春 宗因

最初の七・七（**脇句**） ※連歌会では主催者が詠む

四方ものどかに
明る天の戸 宗春

最初の五・七・五（**第三**） ※連歌会では宗匠が詠む

白雲もひとつに
峰の花さきて 同

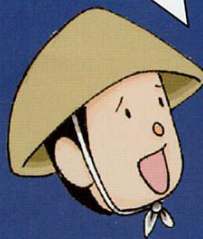
宗因の俳諧の句

すりこ木も 紅葉しにけり 唐辛子 梅翁

※（唐辛子をすりこ木ですりつぶしたら、紅葉のように真っ赤になった）

みんなで詠むから、いろんな発想が出てきて歌の内容がどんどん変化していくのが楽しそうですね。

宗因さんはユニークな句をたくさん作って人気者になったから、それが俳諧発展のきっかけになったんだね。



宗因は俳諧を詠むとき、梅翁・西翁・野梅という名前を使います。